

| 著書、学術論文等の名称 | 単著 共著 の別 | 発行又は発表 の年月 | 発行所、発表雑誌 等又は発表学会等 の名称 | 概 要 |
|--|----------------|---------------|---|---|
| 1 A Novel Low Molecular Weight Factor Detected in the Cytosol of Guinea Pig Neutrophils to Enhance Superoxide Anion Production | 共著 | 平成 4 年 11 月 | Biochem. Int. Vol.28、No3 pp.533-541 (Australia) | 好中球 NADPH オキシダーゼは様々な因子によって活性化され、スーパーオキシドアニオンを産生する。無細胞系においてアラキドン酸によって本酵素を活性化させるとき、低分子の細胞質因子が本酵素の活性化を促進することを見出した。この新規低分子因子は、非タンパクでありこれまで報告されているジアシルグリセロールとも異なる物質であることが示唆された。(9 頁) (武居恒、山口雅史、佐々木順一、土谷亜希子、岡村直樹、石橋貞彦) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。 |
| 2 Cytosolic Protein Phosphatase may Turn off Activated NADPH Oxidase in Guinea Pig Neutrophils | 共著 | 平成 5 年 10 月 | Arch. Biochem. Biophys. Vol.306、No1 pp. 209-214 Academic Press (USA) | 好中球 NADPH オキシダーゼの活性化に、プロテインキナーゼ C によるタンパク質リン酸化が関与していることは示唆されているが、その不活性化機構については明らかではない。本研究では、脱リン酸化酵素阻害薬であるオカダ酸やカリクリン A が本酵素の活性を持続させることを見出した。このことより、タンパク質の脱リン酸化が本酵素の不活性化に関与していることが示唆された。(6 頁) (山口雅史、佐々木順一、桑名真紀、酒井優、岡村直樹、石橋貞彦) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。 |
| 3 Activation mechanism of NADPH oxidase by SDS in intact guinea pig neutrophils. 《筆頭論文》 | 共著 | 平成 6 年 11 月 | Arch. Biochem. Biophys. Vol.315、No1 pp.16~23 Academic Press (USA) | 好中球の活性酸素産生酵素 NADPH オキシダーゼは、プロテインキナーゼ C (PKC) によって活性化することが知られていた。しかしながら、PKC を活性化しない脂肪酸などでも本酵素が活性化することから、PKC 非依存経路の存在が考えられていた。本研究では、好中球をさまざまな刺激条件下で活性化することにより、NADPH オキシダーゼの活性化には PKC 依存経路と非依存経路が独立した形で存在することを示した。また、非依存経路においては細胞膜の流動性の上昇が何らかの関わりを担っていることを示した。(8 頁) (佐々木順一、日浦政則、山口雅史、酒井優、青木和博、安倍寛子、岡村直樹、石橋貞彦) 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。 |
| 4 Sphingosine inhibition of NADPH oxidase activation in a cell-free system. 《筆頭論文》 | 共著 | 平成 8 年 10 月 | J. Biochem. Vol.120、No.4 pp.705~709 Published by Oxford University Press for Japanese Biochemical Society (Japan) | スフィンゴリン脂質の構成成分であるスフィンゴシンは、PKC を阻害することが知られていた。しかしながら、好中球において PKC 非依存的活性化においても NADPH オキシダーゼの活性化を阻害することから、別の要因があると考えられた。本研究では、スフィンゴシンは無細胞系の活性化において活性化剤であるアラキドン酸の活性化までの濃度を高濃度にシフトする働きがあり、すでに活性化した酵素には無効であることを示した。(5 頁) |

| | | | | | |
|---|--|----|-------------|--|---|
| 5 | Differences in Mechanisms for Cell-Free NADPH Oxidase Activation between Arachidonate and Sodium Dodecyl Sulfate | 共著 | 平成 8 年 9 月 | Biol. Pharm. Bull. Vol.19, No.9 pp.1130-1135 (Japan) | 無細胞系における NADPH オキシダーゼ活性化機構を検討するため、活性化剤としてドデシル硫酸ナトリウム(SDS)およびアラキドン酸を用いたときの短鎖ジアシルグリセロールの影響を検討した。SDS 刺激による活性はジオクタノイルグリセロール (diC8) によって 10 倍に増加したが、diC6, diC10 では増加しなかった。アラキドン酸による活性はもともと高く、SDS+diC8 の活性と同様であり、diC8 によって活性増加は見られなかった。アラキドン酸は、SDS によるものと diC8 によるものの両方の活性化能をもっている可能性が示唆された。 (岡村直樹、酒井優、安倍寛子、桑名真紀、土谷亜希子、佐々木順一、山口雅史、石橋貞彦) 担当部分: 共同研究につき本人担当部分抽出不可能。 |
| 6 | 好中球 NADPH オキシダーゼ活性への脂質の関与 | 単著 | 平成 10 年 3 月 | [博士学位論文] (乙)第 3064 号 (広島大学大学院) pp.1~55 | 好中球は、活性酸素を産生することで生体防御に関わっている。活性酸素は、殺菌に重要な役割を担っている一方、炎症や発ガンなどさまざまな疾患に関与していることも明らかになってきた。本論文では、好中球の活性酸素産生酵素である NADPH オキシダーゼがどのように活性制御を受けているかを研究したものである。 好中球は、ある脂質によって活性化されるが、低張条件において相乗的に活性化されることから、細胞膜に何らかの変化が起こることによって活性制御を受けていると考えられた。その一つの可能性として、細胞膜の流動性の上昇が本酵素活性化に関与することが示唆された。また、脂質成分の一つであるスフィンゴシンが本酵素を阻害することを明らかにし、活性のブレーキとして何らかの役割を担っていることが示唆された。(55 頁) |
| 7 | インターネットを使った簡単な医療情報収集 PubMed による検索 《筆頭論文》 | 共著 | 平成 13 年 1 月 | 広島県病院薬剤師会誌 Vol.36, No.1 pp.15~21 広島県病院薬剤師会 | EBM の実践のネックとなるものの一つが、第二ステップである。これは、数ある情報源の中から目の前の患者に当てはまる文献を選び出すことである。この文献検索に、PubMed が有用であるが、その使用方法は初心者には難しい。今回、PubMed の検索方法について解説した。(7 頁) (佐々木順一、木村幸司、三浦常代、竹山知志、大石裕子、熊佐千奈美、三島久枝、佐々木良忠、吉村知幸、島田直実、佐和章弘、松井聡政) 担当部分: 共同研究につき本人担当部分抽出不可能。 |
| 8 | 栄養士のためのエビデンスの探し方・情報の読み方—講座 11 症例対照研究を読んでもみよう—食中毒から大豆まで | 単著 | 平成 17 年 5 月 | 臨床栄養 Vol.106, No.5 pp.616~620 医歯薬出版株式会社 | 栄養士対象の EBM 講座の一つとして、症例対照研究の解説を担当。栄養士が身近で体験することのある食中毒の原因調査の疫学調査をはじめに、データの取り扱い方を解説。次に、大豆タンパクが乳がん抑制効果があるとした症例対照研究を事例に挙げて、論文を読むときに必要なチェックポイントを挙げ、どのように読み進めるかを解説した。また、症例対照研究で新しい知見が出たときに、そのデータをどのように取り扱うか、その考え方を示した。(5 頁) |

| | | | | | |
|----|--|----|--------------|--|--|
| 9 | 広島 JMAT(日本医師会災害医療チーム) 第一班報告～広島県医師会と広島県薬剤師会の合同チームが石巻市の医療支援に出動！～ | 共著 | 平成 23 年 4 月 | 広島県医師会速報 第 2116 号 pp1～9 社団法人 広島県医師会 | 広島県医師会では、日本医師会の要請を受け、東日本大震災の被災地への医療支援の目的で、広島JMAT(日本医師会災害医療チーム) 第一班(松村誠団長10名)を編成し、平成23年3月24日より3月28日までの5日間の日程で、宮城県石巻市に派遣した。現地では、3月25日より27日までの3日間、宮城県石巻市雄勝町で、10ヶ所の避難所を中心に医療支援活動を行い、延べ87人を診察した。約半数は高血圧、不整脈などの循環器疾患で、うち1人の心不全患者を救急搬送した。その広島JMAT第一班の活動について概要を報告した。(9頁) (松村誠、天野國幹、藤原恵、佐々木順一、住田貴臣、中島彩、田坂一雄、水上遙、前川澄行、中元一望) 担当部分:担当部分6-7頁。 |
| 10 | 広島県 JMAT における薬剤師の活動; 効率的な活動を行うための取り組み 《筆頭論文》 | 共著 | 平成 23 年 7 月 | 月間薬事 Vol.53 No.7 pp.987-990 株式会社薬事日報社 | 東日本大震災の医療支援として、広島県医師会 JMAT は 7 チームを石巻市に派遣し医療支援活動を行った(3月25日～4月16日)。薬剤師は6チームに同行し、調剤業務をメインに支援活動を行った。活動を振り返って、携行医薬品の選定方法を改善することによってより効率的な活動が可能であること、業務効率と継続性を図るために現地におけるマニュアル作りが必須であることが明らかとなった。(4頁) (佐々木順一、宮内隆志、村上信行、荒川隆之、妹尾啓司、佐伯朋美) 担当部分:共同研究につき本人担当部分抽出不可能。 |
| 11 | 東日本大震災における被災地支援活動報告 《筆頭論文》 | 単著 | 平成 24 年 1 月 | 薬学生新聞 第 32 号 pp. 3 株式会社薬事日報社 | 東日本大震災の医療支援として、広島県医師会 JMAT 第 1 班、日本薬剤師会中国ブロック第 6 班として活動した内容について報告した。被災地における医療支援は、多くのチームが参加し短期間の医療活動を行う。その中で効率的に活動を行うためには、業務内容の引き継ぎや医薬品リストの更新が必要不可欠であることを報告した。(1頁) |
| 12 | 薬剤師の EBM 教育の現状 《筆頭論文》 | 共著 | 平成 26 年 12 月 | 治療 Vol.96 No12 pp.1692-1695. 株式会社 南山堂 | 医療者全体がお互いの職能を理解し、一層連携するためには、薬剤師の臨床能力の向上、特に臨床論文の判断能力、多職種が連携した EBM (Evidence-based Medicine) の実践能力が問われる。6年制薬学教育における EBM 教育の現状をシラバス調査を行うと同時に、多職種協働学習への取り組みを紹介した。(4頁) (佐々木順一、水野成人、高垣伸匡、福岡敏雄) 担当部分:共同研究につき本人担当部分抽出不可能。 |

| | | | | | |
|-----|---|----|--------------|---|--|
| 13. | 小児適用の一般用医薬品（液剤）におけるチャイルドレジスタントパッケージ（CR 容器）の普及率と計量カップの目盛の視認性に関する調査 《筆頭論文》 | 共著 | 平成 27 年 2 月 | 日本薬剤師会雑誌 Vol.67 No.2 pp.197-199 日本薬剤師会 | 一般用医薬品の小児用液剤におけるチャイルドレジスタントパッケージ（CR 容器）の採用率及び計量カップの目盛の視認性について調査を行った。CR 容器の採用は 21.8%と普及率が低く、カップの目盛の視認性が良い製品は 8.3%と少なかった。パッケージのイラスト有、1 本容量が大きいものを選ぶと CR 容器の採用の製品に当たる可能性が高いことを明らかにした。（3 頁） （佐々木順一、吉村元宏、吉永佳織、山口雅史、塚本豊久） 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。 |
| 14. | 薬剤師の EBM 教育の現状 《筆頭論文》 | 共著 | 平成 28 年 12 月 | 治療 Vol.96 No.12 pp.1692-95 南山堂 | 薬剤師・薬学生向け EBM の学びの場として、2010 年度より Student CASP ワークショップに取り組んでいる。多職種連携学習を学生の早い段階から経験するこの取り組みは、医療職の垣根を越えて処方について話し合う場を提供している。（4 頁） （佐々木順一、水野成人、高垣伸匡、福岡敏雄） 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。 |